



オーロラ

北緯62度27分、北極圏から南におよそ400kmに位置するカナダ・イエローナイフ。そこに言葉に尽くせない得も言われぬ感動と共有感覚の体験があった。

イエローナイフは、12月の極寒期には最低気温がマイナス20℃を超える所で、この写真を撮った9月でもその夜は零度近い寒さだった。

その寒い漆黒の星空に見たオーロラの出現は、広大な宇宙の中の我々が住む地球という天体の息遣いを感じる様な湧き出る感動と、周りの見も知らぬも人達全員が同じ感動に包まれるという不思議な一体感を感じる、特別な体験となった。

グランドキャニオン、イグアスの滝、マッターホルン、など自然の感動に数多く出会ったが、一生にもう一度見たい物を一つだけ挙げるとしたら、やはりオーロラを挙げると思う。

文と写真 向井 恭也

会報191（令和5年1月号）目次

新年を迎えて	三村理事長	1
委員長挨拶		3
ずいそう「青木嵩山堂」に全容とその謎にせまる（前編）	青木俊造	5
（第51回）秋の旅行「五島列島4日間の島旅」	栗川勝俊	15
（第12回）自然散策会「我孫子・手賀沼付近散策記」	織田文雄	22
（第47回）音楽鑑賞会「第132回定期演奏会」	仲村清美	24
（第103回）歌舞伎観劇会「十一月吉例顔見世大歌舞伎」	相田實	26
（第3回）宝塚歌劇観劇会「グレート・ギャツビー」	山田清實	28
（第1回）浪曲会「三代目広沢菊春襲名披露興行」	山田清實	30
（第113回）ゴルフ大会（清澄ゴルフ倶楽部）	寺原正紘	32
講演会・Monday Forumのお知らせ		34
新入会委員の紹介Forumのお知らせ		34
今後のスケジュール		35



新年を迎えて

理事長 三村 明夫
(日本製鉄㈱名誉会長)



明けましておめでとうございます。会員の皆さまにおかれましては、良き新年をお迎えになられたことと、心からお慶び申し上げます。

昨年は感染状況に十分留意しつつ、アイアン・クラブ主催行事の一部を開催することが出来ました。私も12月に清澄ゴルフ倶楽部にて行われましたゴルフ大会へ参加いたしました。顔を合わせて親睦を深めるこうした機会は大変有意義なものであることを改めて実感いたしました。

足元の鉄鋼業について述べますと、原材料価格の高騰や急激な円安の進行等、非常に厳しい事業環境が継続しております。これに加え、将来的な脱炭素化の実現に向けた各国の研究開発も加速しており、今後の業界の趨勢を決する極めて重要なターニングポイントに差し掛かっている状況にあります。石炭還元に頼らない超革新的生産プロセスの開発、カーボンフリー電源の確保等、脱炭素化に向けて今後クリアせねばならないハードルドは多々ございますが、産・官・学の総力を結集の上、これら課題への対応が進むことを願っております。

昨年を振り返りますと、ロシアのウクライナ侵攻により世界中が混乱に陥った一年であったと言えます。我が国も例外ではなく、国家安全保障、エネルギー安全保障、食料安全保障等、日本が直面している様々なリスクを国民一人ひとりが改めて再認識することとなりました。とりわけエネルギー問題は、資源小国、且つ国際的な送電網を持たない我が国にとって喫緊の政策課題です。昨年政府はGX実行会議において、原子力発電所の再稼働の加速化や、運転期間の延長、次世代革新炉の開発等について打ち出しましたが、安定・安価なベースロード電源として原子力を再活用する方策がようやく提示されたことは、我々産業界としては大変歓迎すべきこととあります。エネルギー問題のみならず、我が国を取り巻く様々な課題についても、目の前の現実を直視した国民的な議論が今後進展することを期待したいと思います。

さて、アイアン・クラブは、鉄鋼という一つの業種で、川上から川下までサプライチェーン全般に関わる多くの企業のOBと現役が参加する自主独立の組織であり、オール鉄鋼人の会として、人と人とのつながりを提供し、OB生活、現役生活を豊かにする場と言えます。コロナ禍で活動は一定程度縮小せざるを得なくなりましたが、昨年ようやく、徐々に活動を

再開し、アイアン・クラブの中核事業である講演会は、オンライン形式、ハイブリット形式で、昨年は14回を数えることができました。また、秋には五島列島への旅行、音楽鑑賞、歌舞伎鑑賞、宝塚鑑賞、さらにはゴルフ会と、活動する事業が増えてきたことは、大変喜ばしいことです。

これらに加え、ポスト・コロナのアイアン・クラブの活動活性化に向け、プロジェクトチームの提言を受けて、会員勧誘を進めることや新たな企画にチャレンジすることにしておりますが、会員としては、現役世代を中心に約90名の新しい仲間を迎えることができました。また、新たな事業としては65歳以下の会員を対象に、Monday Forumをスタートさせ、多くの方に参加いただいております。引き続き会員の皆さまと共に「よく学び・よく遊び・親しい仲間と対話する」活力溢れるアイアン・クラブを作って参りたいと思いますので、皆さまの一層のご支援とご協力をお願いいたします。

最後になりますが、皆さまの益々のご健勝、ご多幸を祈念いたしまして、年頭のご挨拶とさせていただきます。

総務委員長挨拶 羽矢 惇 (元) 新日鉄エンジニアリング



群れる楽しみ

コロナに見舞われて3年。友人と群れる楽しみ、群れて新しい出会いを作る楽しみが存在価値であるアイアン・クラブはコロナ禍で事業中止や会員の大幅減など甚大な影響を受けました。昨年の活性化プロジェクト提言を受け、総務委員会では最大任務である会員拡大に取り組み、関係者の努力でコロナ以前の会員数に回復できました。また、各事業委員会の活動も新年度からは従来レベルに戻す方針だと伺っています。

総務委員会としては今後もクラブの継続的発展のため若手会員の勧誘に努力するとともに全会員にと

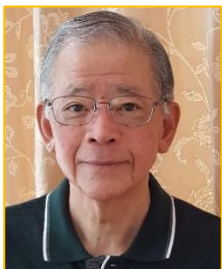
って魅力ある事業を実行する各事業委員会へのサポートに注力する所存です。

次世代会員の積極的参加を期待してスタートしたMonday Forumは順調に立ち上がりつつあります。

一方で会員の高齢化やアフターコロナ時代に対応する新しい群れ方の追求もアイアン・クラブの大きな課題ではないかと思えます。

自宅から近場で世代や出身母体を超えた会員同士が気楽に交流し、旧交を温め、新しい出会いを作る——こんな群れ方も追及する意味があるのではないかなと諸先輩が築いてきた歴史を次世代につないでいきたいと思えます。

第一事業委員長挨拶 横手 康紀 (元) 三井物産



委員長を拝命してもう3年、講演会で毎度拙い司会を務めております。

今更ですが先ずは簡単に自己紹介。出身会社の三井物産では、鉄鋼の仕事と経営企画・人事と言った本部の仕事を行ったり来たり、その間4度の海外駐在も経験しました。会社生活の終盤にはインドネシアや米州の責任者も務め、やや鉄鋼色の薄いキャリアとなりましたが、会社卒業後はアイアン・クラブで鉄鋼出身の皆様と楽しく過ごさせて頂いています。

私の使命は、諸先輩が作り上げて来られた歴史ある催し「午餐会」を維持し発展させることだと認識しています。コロナ禍、良き仲間の助けを得ていち早くオンラインに切り替えたことで講演会を維持することは出来たと自負していますが、残念なことは参加者が100名前後に止まり、発展しているとは言い難いことです。

第一事業委員会は12名の委員で構成、半年に一度活発な議論を戦わせて講演者を決めています。委員の

皆さんは世界の動向に精通し、幅広い人脈を持ち、会員の皆様との交流も絶やさないう素晴らしい方ばかりですので講師選定の方向性に間違いはないと思っておりますが、やはり出来るだけ会員の皆様から講演会全体に対する感想やご意見を頂く機会は増やしたい。その為に、ホームページに会員間の意見交換の場を作って頂けるようお願いもしています。勿論、徒に個々の意見に引っ張られて講師選定や講演会のあり方を変えようとは思いませんが、常にfeedbackの機会を持ち自己満足に陥らないようにしたいとの思いです。

又、コロナの状況を見ながらですが、極力鉄鋼会館での開催を増やしたいと考え実行に移しています。ただ、今後ともZOOMでの同時配信は実施して参ります。インターネットは、始めるのに少し手間が掛かりますが、移動が不要になる等高齢者に適していますし、多くの新しい発見にも繋がります。未だ始めておられない皆様にも是非try願ひZOOMでの参加を可能にして頂きたく、機器の調達やsoft面でのsupportをIT委のご協力も得て行って参りたく考えているところです。

第三事業委員長挨拶 山田 清實 (元)伊藤忠商事



この度、引き続き二期目の第三事業委員長を拝命しました山田清實です。1968年に伊藤忠商事に入社、輸出鋼管課に配属され、専ら鋼管貿易の仕事に携わりました。入社早々人事部からアラビア語の語学研修生打診を受け、上司の忠告に耳を貸さずにエジプトカイロで二年間の大学生活を楽しんだ報いで、その後は欧米での駐在生活を謳歌する同僚を横目に、アラビストとしてエジプト、イラン、インドネシアと、イスラム圏に駐在をしました。第三次中東戦争、第四次中東戦争の影響が残る戦時体制下のエジプト、ベイルート紛争、イラン革命を体験、激動の60年代後半から70年代の中近東で、還元鉄のプロジェクト、エネルギー関連の鋼管販売、家電、自動車など産業用の鉄材を、三国貿易を絡めて、営業活動に精を出しました。80年代には、インドネシアスマトラ島で亜鉛鉄板製造の現地資本、川鉄、伊藤忠の合弁会社に出向しました。30年間の鉄鋼部門での経験を経て、1997年エネルギー部門に転籍し、石油、天然ガスの上流開発、貿易に関わりました。2001年、金属エネルギーカンパニープレジデントとして、伊藤忠丸紅鉄鋼会社の設立に関わり、2002年伊藤忠を退職し、エネルギーの卸販売会社である伊藤忠エネクスに移り、社長、会長を6年間勤めて、完全退職しました。

アイアン・クラブは、退職後ですから15年ほどで、最初の行事参加は鹿児島・宮崎の「篤姫の旅」でした。初めてご挨拶をさせて頂く大先輩諸氏と四日間の旅で親しく接する事が出来、以来病みつきとなり、夫婦で毎

年参加し、第二事業委員会委員として、お世話係を楽しく務めています。

私は、生来遊び大好きで、広く浅く趣味を楽しむタイプの人間ですが、その辺を見抜いた先輩から第三事業委員会のお誘いがあり、お引き受け致しました。第三事業委員会では、会員の皆様、ご家族に教養を高めたり、趣味を楽しんで頂こうと、主にゴルフや音楽鑑賞、観劇、囲碁、麻雀の会を開催しています。ここ三年のコロナ禍で麻雀と囲碁が実施できていません。歌舞伎年3回と音楽鑑賞年6回プラスは厳重な感染対策の下、開催が続いています。宝塚は11月久し振りに開催し、楽しんで頂きましたので、本年は1月星組、4月月組公演をご案内しており、年3~4回の開催を予定しています。ゴルフは一昨年暮れから再開し、昨年は新しいゴルフ場を開拓し、年5回を計画、降雨による中止が1件あったものの4大会を実行しました。本年は、昨年同様新しいゴルフ場を含め年5回開催の予定です。麻雀、囲碁は本年再開します。ご期待ください。昨年は初めての試みで、浪曲大会のご案内をしましたが、今年は大相撲、ブロードウェイミュージカルを計画したいと思います。

クラブの長い歴史や熱心な会員の方々ご協力のお陰で、充実した内容の行事ばかりです。どの行事にもクラブから補助があり、割安でお楽しみ頂ける様になっています。より多くの会員とご家族にご参加頂ける様に開催日、時間の工夫、行事の多様化など考えますので、どうぞご希望をお寄せ下さい。一度ご参加して頂ければ、良さを実感してもらえと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

関西・中部地区委員長挨拶



住友金属工業では、労政部門一筋でした。

昭和の時代は春闘で鉄鋼労連との交渉に携わり、所謂“鉄の一発回答”でその年の賃上げ相場を決めることに尽力しました。鉄鋼業が産業界の中心的存在であった証左であり、誇らしくもあり、また懐かしく思い出されます。

平成の時代は余剰人員が課題でしたが、何とか雇用維持が図られたのは従業員の理解と協力、更には良き労使関係の賜であったと思います。

さて、アイアン・クラブの当委員会はメンバー数が全会員の1割にも満たない40名強で、しかも大阪の会合

松村 光雄 (元)住友金属工業

に出にくい地域の方も多くおられ、また熱心に参加して頂けるメンバーの方々も年々高齢化している中での運営です。

大阪のホテルでの昼食会は年2回(4月と12月)、講師を招いて時宜を得たお話を聞きながら懇談しております。

その他歌舞伎、文楽の観劇、東広野ゴルフ倶楽部でのゴルフ会を行っています。

コロナで3年間活動を休止していましたが、再開に向け去る10月5日臨時の委員会を開催し運営方法等について協議・確認したところです。新たに私が監事をしている香雪美術館(大阪中之島と神戸御影)の鑑賞を加え、老・老・壮の親睦を更に深めていきたいと思っています。



明治の終焉と共に忽然と消えた総合出版社

すうざんどう

「青木嵩山堂」の全容とその謎に迫る(前編)

青木俊造 (元)新日本製鉄



<はじめに - 文芸作品に登場する青木嵩山堂>

「青木嵩山堂という本屋に来る。・・・彼は青木嵩山堂で李白の小さい詩集を買った」。これは志賀直哉の小説『暗夜行路』の前編終わりに、主人公の小説家である時任謙作が「青木嵩山堂」で買った李白の詩集を読みながら、前日の女を待つ場面の前に描かれたくだりである。『暗夜行路』は大正10年、雑誌『改造』に連載され、17年の歳月を経て完成した長編小説であるが、元々は『時任謙作』という名前で大正3年に夏目漱石の推薦を受けて東京朝日新聞に連載予定であったので、志賀直哉は、明治末期から大正初めにこの原稿を書いたものと思われる。

関西に移り住んだ谷崎潤一郎が、70歳にして生まれ育った明治期の東京を懐かしんで書いた『幼少時代』の「幼少より少年へ」の項には、「日本橋付近には・・・青木嵩山堂、丸善、博文館などの書籍店があったので、十三、四歳頃からは、・・・読めもしないのにむずかしい本を求めに行った」として「上田秋成の『雨月物語』の・・・木版の一冊本があることをも知って、・・・それを嵩山堂に買いに行ったりした。嵩山堂へは、大塩中斎（平八郎）の『洗心洞筋記』も買いに行った」と記されている。谷崎潤一郎は明治19年に東京日本橋に生まれたので、13～14歳といえば、明治32～33年の頃である。「稲葉清吉先生」の項には、「私は先生が青木嵩山堂で売っていた・・・白文の『王陽明全書』十巻を蔵していて・・・王陽明の漢詩を説明してくれたことを覚えている」ともある。

この2つの文芸作品に実名で登場し、明治期の知識人の必須アイテムであった漢詩・漢学に関する書籍（漢籍）や、江戸期の著名な文芸作品、思想書を揃えている「青木嵩山堂」とは、いかなる「本屋」「書籍店」であったのであろうか。実は、この頃は、江戸期の流れから書肆（しょし）と言われた出版社が、自ら発行した書籍の直売所として書店を併設していたのであって、西洋の書籍や文具を輸入して販売した丸善（明治2年創業）を除けば、明治期には独立した大手の新刊書店はなく、古本屋が出版物の流通の役割を担っていた。



東京本店（日本橋）

今でこそ書店は、書籍の流通取次ぎ業者を介して出版社から書籍を仕入れ購入して販売しているが、この形態（書店と出版社の分離）が一般的になるのは取次ぎ業者が活躍する明治後期からであり、冒頭の文芸作品には、出版社の小売販売・書店としての「青木嵩山堂」や博文館（明治20年創業）が

描かれていたのである。現在の大手出版社の多く（新潮社や講談社、岩波書店、中央公論社、文芸春秋社など）は、いずれも明治期後半から大正期にかけて創業した出版社であるが、その前の明治期の出版社として、「青木嵩山堂」は、どのような出版社と覇を競い、どのような書籍を出版・発行していたのであろうか。

青木家には、私の曾祖父、青木恒三郎が明治期に大阪の心齋橋で「青木嵩山堂」という出版社を経営するも、大正期には後継者難もあり廃業したとの話は伝わっていたが、どういう書籍を出版していたとか、どの程度の規模の出版社なのか「青木嵩山堂」に関する資料がほとんど残されておらず、その創業の経緯や発展の過程、廃業の理由も長らく謎であった。それでも長兄の青木育志が青木家のルーツを探る一環として、長年に亘り「青木嵩山堂」の出版物を丹念に調査研究してきたので、全容が少しずつ明らかになりつつあった。

私が「青木嵩山堂」に関する文芸書、美術書の出版活動状況を調査・研究してみようと、取り組み始めたきっかけは、会社をリタイア後に鎌倉にある鐮木清方記念美術館を訪れたことから始まる。清方の肉筆美人画を楽しみに出かけた私は、そこで美人画の傍に展示されていた小さな木版面に目を奪われた。それが明治期の文芸小説や文芸雑誌の巻頭を飾った木版の口絵と表紙絵の世界との出会いであった。その小説の単行本の表紙や口絵、挿絵をあの美人画で有名な鐮木清方が描いていたのに驚くと共に、小説の表紙と一体となった裏表紙には、何と「青木嵩山堂発行」のデザイン的なロゴ文字があるではないか。「青木嵩山堂」と日本画家、鐮木清方を結びつける手掛かり、それは明治期の小説などの単行本の装丁・口絵にあった。



江見水蔭著『花』（明治36年）
木版表紙絵・裏表紙；鐮木清方

こうして国立国会図書館をはじめ、各地の図書館を訪ね歩くと共に、そのネット情報も活用しながら、「青木嵩山堂」が出版した文芸書の奥付と口絵、表紙絵を描いた画家を1件、1件確認、明治期の文芸書や美術書の制作過程も調査研究したところ、驚くほど多くの木版口絵付の文芸書を確認することができただけでなく、「青木嵩山堂」廃業の真因にも辿り着くことになったのである。思いも寄らぬ展開になったが、この文芸書・美術書の調査研究成果を長兄のこれまでの「青木嵩山堂」に関する総合的な研究成果に付加して、『明治期の総合出版社－青木嵩山堂』（アジア・ユーラシア総合研究所）を長兄との共著で上梓した。

詳細は新著に譲るが、ここでは冒頭の文芸作品に登場する「書店」としての「青木嵩山堂」だけではなく、木版彩色の表紙絵・口絵の付いた文芸作品を出版する「出版社」としての「青木嵩山堂」を中心に、その後の情報も加味して、忘れられた「青木嵩山堂」の全容と何故、明治の終焉と共に忽然と消えたのかその謎に迫りながら、明治という時代や社会・文化の一側面も併せてご紹介することとしたい。尚、アイアンクラブ事務局のご厚意で本稿は2回の連載とさせて頂く。今回は前編として「青木嵩山堂」の代表的な出版物を成長の軌跡に併せてご紹介しながら、その全容を概観するものである。

＜青木嵩山堂の概要＞

「青木嵩山堂」は、明治期に大阪心齋橋を本拠として、東京日本橋にも店舗を構え、明治13年から大正7年まで存続した総合出版社兼書店であった。創業者の青木恒三郎（文久3年～大正15年）は、代々漢方医であった上田家13第当主上田文齋の三男で、明治5年9歳の時に大阪心齋橋にある明善堂中川勘助書店に丁稚奉公に出て、6年間の修行期間を経て、明治11年に15歳で独立、古書店の開設と共に父の親方筋の青木家を継ぎ、2年後に書肆として心齋橋北詰めで出版社を開業した。

青木恒三郎は、祖父の上田旦齋から漢学と書道の手ほどきを受け、漢詩・漢文に精通していたこともあり、書肆の名前については、中国の五岳の一つとして有名な河南省にある「嵩山（すうざん）」から名付けている。嵩山には古来から山岳信仰があり、禅仏教が伝わった少林寺や道教の有名な寺が多いことから、「精神的修養の場所」という意味で、「嵩山」を拝借したと思われる。



青木嵩山堂 大阪本店（心齋橋）

「青木嵩山堂」が本店を構える大阪心齋橋筋北側界隈は、江戸時代から書肆（出版社）の町として有名で、「心齋橋の文化史」によれば明治34年頃で40を数えるほどの出版社街であった。本店はその心齋橋筋北側の博労町の一角（今の御堂筋グランタワービル）にあり、その南北にある大淵駉々堂、金尾文淵堂などと覇を競っていたが、やがて関西では最大の出版社となり、青木恒三郎は大阪図書出版業組合の初代会長にも就くことになる。

明治の東京において、覇を唱える出版社としては、博文館が最大手であり、春陽堂（明治11年創業）、金港堂（明治8年創業）などが続いていたが、「青木嵩山堂」は早くも明治17年には東京に進出、東京支店（東京本店）として、日本橋の白木屋百貨店（後の東急百貨店、今のコレド日本橋）の向かい側の一等地に店舗を構えていた。東西で拠点を構えた出版社は、「青木嵩山堂」だけであり、冒頭の文芸作品に登場するのは、日本橋に構えた「青木嵩山堂」東京本店であった。

では「青木嵩山堂」は、どれだけの規模の書籍を取り扱っていたのか。「青木嵩山堂」は、取次ぎ業者が発達しておらず、ために新刊書店がまだ少なかった明治期において、書店として仕入れ調達部門を社内に設けて、他社発行の書籍を多数仕入れ販売していた。同業他社が自社発行書籍の直売先として書店を併設していたのに対し、毎月『内外書籍出版発行目録』（以下、『販売目録』と称す）を発行し、店舗に来れない全国の読者・購買者に配付しながら、自社の発行物だけでなく、他社出版物を多数仕入れ販売していた異色の出版社であった。言わば、カタログによる通信販売の元祖であったのだが、その取扱い目録に掲載された書籍数は、5,300点に上った。

この内、「青木嵩山堂」が出版社として、発行した部数はいくらか。『明治書籍総目録』の明治44年版によれば、最大手の博文館の2,961点（1,961点の申告を全集・叢書の各巻を1点として補正）に対し、「青木嵩山堂」は、



『内外書籍出版発行目録』

（販売目録；明治44年版）

1,569点になっている。明治44年までに廃版になったものを考慮すれば、1,650点（冊数換算すれば2,600冊）程度と思われる。つまり、3,731点の他社出版物を含め、5,300点以上を取り扱う明治期では全国最大の書店であったと言える。博文館など明治期の出版社は、自社出版書は自ら書店として販売していたが、他社出版物は取り扱っていなかったからである。因みに、紀伊国屋書店やジュンク堂書店、旭屋書店などの現在の大型書店は、取次ぎ業者から書籍を購入する仕組みが定着した昭和の創業である。

一方、本業の出版社として、「青木嵩山堂」はどういう分野でどのような書籍を発行していたのであろうか。『販売目録』の目次を見れば、出版領域は非常に幅広いが、大きく3つの分野に大別できよう。一つは旅行書、地図、語学書などの実用書であり、二つは小説などの文芸書である。三つは漢学書、自然科学書などの学術書、辞典、美術書などの教養書である。但し、博文館や春陽堂が注力していた雑誌は発行せず、専ら単行本主体の総合出版社であった。

「青木嵩山堂」が出版社として、成長していく過程を踏まえ、実用書、文芸書、教養書の順番でその代表的な出版物や時代背景を概観してみる。

<草創期における実用書の出版活動>

江戸期からの書肆の流れを汲む「青木嵩山堂」は、創業からの10年間（明治13年から明治22年までの草創期）は、旅行書、地図、語学書などの実用書を中心に成長に向けた坂道を登り始める。創業当初は、和紙に木版印刷して和綴製本する和本を中心に、『釈迦御一代記図會』（葛飾北斎絵；明治17年）など木版絵画の複製版を細々と出版していたが、明治18年から



『世界旅行万国名所図絵』（明治18-19年）

19年にかけて創業者青木恒三郎自らが編集した『世界旅行万国名所図絵』全8巻を出版したことが成長への転機となった。これは明治政府の欧化政策もあり、欧米など異国への関心が集まっていたことから、写真や絵葉書がまだあまり普及していなかった時代に、世界各地の観光名所だけでなく、歴史・文化や風俗まで、細密な銅版画の挿絵と共に紹介した日本で最初の世界旅行案内書であり、「青木嵩山堂」にとって初のベストセラーとなった。



『内国旅行日本名所図絵』（明治21-22年）

『世界旅行万国名所図絵』の増版で、姉妹版とも言える『内国旅行日本名所図絵』全7巻を明治21年から22年に刊行。こちらも明治期の日本全国の名所案内としては、最初であったと思われるが、明治22年の東海道線の全線開通に伴い、鉄道による旅行案内書が各出版社から続々刊行される先駆けとなった。尚、本著は青木恒三郎の実父である上田維暁（上田文斎）の著作である。『世界旅行万国名所図絵』には世界地図が添付され、『内国旅行日本名所図絵』は折り畳み地図でもあったため、「青木嵩山堂」では、以後、国内外の旅行ニーズや大陸進出機運もあり、内外の地図や地図帳、旅行記の出版に繋がった。上田貞治郎編『万国地図』（明治19年）、荒川義泰『（鉄道明細）大日本全地

図』（明治23年）など多くの地図や地図帳が刊行され、地図帳なら「青木嵩山堂」との評価を高めた。

また、明治期中頃には、政府の欧化政策、列強との対抗上、海外情報を入手するためにも、語学、とりわけ英語習得ニーズが高まっていたこともあり、この海外旅行案内の成功により、「青木嵩山堂」は英語に関する語学書や辞典の出版に注力することになった。ウェブスター著、渡辺研訳『英語独案内』（明治19年）、箸尾寅之助編『新訳和英辞典』（明治20年）、井上勤『英和完全会話書』（明治31年）などを発行している。尚、上田貞治郎は、青木恒三郎の次兄であり、箸尾寅之助は次弟の上田竹翁の筆名である。

このように草創期には、旅行、地図、辞典・語学書などの出版で、西欧文明の吸収と近代化に向けて明治期の庶民の精神世界を充足させただけでなく、江戸期以来の書肆として、安井算知『囲碁捷徑』（明治22年）、坂田三吉『将棋手鑑講義』（大正3年）などの囲碁・将棋や、竹軒楽人『煎茶早学』（明治31年）、風流庵『生花独習自在』（明治26年）などの茶道、華道、尺八・箏など趣味・娯楽の世界でも、日本固有の文化の継承に取り組み、成長期へと駆け上った。

<成長期を支えた文芸書の出版活動>



末広鉄腸著『雪中梅』（明治23年）
表紙絵：水野年方

次なる「青木嵩山堂」の成長期（明治23年から38年の16年間）を支えたのは、小説、文芸書の出版であった。江戸期以来の戯作や評論の文化を経て、明治期の文芸は、政治小説から始まったと言えよう。明治期の自由民権運動の思想を国民に伝える方法として、日本でも政治小説が明治16年頃から出版され始めていた。明治19年には、末広鉄腸がいかにか完全なる国会を作るかをテーマに『雪中梅』上下を博文堂から出版し、世の中は明治憲法の制定（明治22年）と国会開設（明治23年）に向けて政治小説華やかりし頃を迎えていた。

「青木嵩山堂」は、先ずは、末広鉄腸を取り込み、『雪中梅』の第6版（明治23年）から上下一体本の改訂増補版として出版。『雪中梅』は

版を重ね、20版に達する程人気を博し、自由民権運動を盛り立てたのであった。翌明治24年には、

「青木嵩山堂」は尾崎紅葉らの硯友社を離れ、言文一致の小説を目指した山田美妙や明治文芸の代表格となる幸田露伴を取り込み、政治小説とはかけ離れた文芸小説を相次いで出版したのである。山田美妙が言文一致の小説を目指したのに対し、幸田露伴は真逆の言文不一致で、漢文や経典からの引用が多く、東洋的、ロマン的、観念的な理想主義を追求し、明治25年に、『小説尾花集—五重塔・血紅星』を出版した。『五重塔』は東京谷中の感応寺（天王寺）にあった五重の塔が江戸後期に大火で焼失したが、その再建事業を題材に、愚直な大工が棟梁や上人の心情を織り交ぜながら理想を追い求める姿と、五重塔が嵐で揺れ動きながらも倒れない姿が描か



幸田露伴著
『五重塔・血紅星—小説尾花集』
（明治25年）表紙絵：福井月齋

れ、写実主義の尾崎紅葉とは一線を画した作品であった。最初の売れ行きは芳しくなかったが、題名も『五重塔・血紅星—小説尾花集』に変更しながら、10年間で版を十数度重ね、明治36年には遂に全国ベストセラーに輝いたのである。

このように明治期の文芸作品の流れは、先ず、政治小説が現れ、次いで二葉亭四迷の『浮雲』や硯友社の尾崎紅葉、山田美妙のような言文一致運動に沿うような近代的な小説が現れるが、これに対抗するかのようにな幸田露伴や森鷗外などの文語体での純粋文学の世界と、黒岩涙香や村上浪六などの通俗小説、大衆小説の世界が並存することになる。「青木嵩山堂」でも、幸田露伴のような純文学を志向した文芸作品だけでなく、村上浪六、江見水蔭などの通俗小説、大衆小説の世界も同時展開している。

村上浪六は、元々春陽堂で時代小説を書いていたが、トラブルから「青木嵩山堂」に乗り換え、一番多く（76冊）の文芸書を出している。村上浪六の時代小説は、撥鬢（ぼちびん）小説と言われ、



村上浪六著『当世五人男』
(明治29年)表紙絵：水野年方

江戸時代の町奴の髪（鬢）が三味線の撥に似ていたことに由来するが、その町奴は旗本奴に対抗して徒党を組み、派手な服装で無頼の生活を送った。そして、その町奴が主人公の任侠小説（撥鬢小説）を明治の現代世界に移して、五人の書生の共同生活を通じて、現代人がいかに生き、どのように処すべきかを作品化したのが明治29年に発売された『当世五人男』である。全18冊にも繋がる一大ロマンの幕開けであり、その年の全国ベストセラーになった。

江見水蔭は、尾崎紅葉らの硯友社で純文芸作品を春陽堂から出版していたが、春陽堂への反発から明治28年からは「青木嵩山堂」に活躍の場を移し、『花』（明治36年）、『二人女王』（明治39年）など、村上浪六に次ぐ49冊の文芸作品を著した。最初は純文学を志向していたが、後半は探偵小説、冒険小説、科学小説などの大衆小説、通俗小説の分野に活路を求めた。

こうした明治20年代以降、出版された文芸作品の装丁は、従来の江戸期からの和本とは異なる装丁を施すことになる。明治30年頃には、洋紙に活版印刷した洋装製本する洋本が主流になり始めるが、洋本に切り替わる前の折衷タイプとして、この頃の文芸書の単行本には、洋紙に活版印刷した本文に、和紙に美しく彩色した手刷り木版の表紙絵（裏表紙と一体）と表紙の次に口絵を装着し、絹の緒で綴じる和装本スタイルが標準となりつつあった。文芸書に木版口絵を本格的に採り入れたのは春陽堂であった（明治21～22年頃）が、博文館も文芸雑誌に木版口絵を配して、口絵文化が開花しつつある時であった。

江戸期の木版美術書の再刊を手掛けてきた「青木嵩山堂」も、明治24年から木版彩色の口絵や表紙絵を文芸小説の単行本に装着させる。口絵には、明治政府の教育政策もあり、義務教育を受けた大衆、特に女性層を意識して、文字だけでは敬遠されると思ったのか、色鮮やかな絵で小説の主人公や時代背景を読者に伝える役割があり、それを可能にしたのは、江戸期の浮世絵の伝統を継承した絵師と彫師や摺師が存在したからであった。

かくして冒頭の「青木嵩山堂」と日本画家、鏗木清方を結びつける手掛かりとしての文芸書の木版口絵の世界に繋がるのであるが、文芸書と木版口絵の関係を1件ずつ調査した結果、「青木嵩山堂」が出版した文芸書の中で、木版口絵・表紙絵が着いた文芸単行本は282冊に達し、春陽堂の270冊を上回った。口絵研究家の山田奈々子をして、「青木嵩山堂は最も多く口絵を採用した文芸単行本を発行した出版社ではないか」と『木版口絵総覧』で指摘していたことを裏付けることができた。

「青木嵩山堂」の文芸単行本282冊の中で、一番多く木版彩色の口絵・表紙絵を描いたのが、京都の上村松園と並ぶ東京の美人画家である鏗木清方であった。鏗木清方は、江見水蔭や村上浪六の通俗小説を中心に、その1/3にあたる91冊に口絵・表紙絵を描き、「青木嵩山堂」の文芸書販売に貢献したのであった。次に多い画家は、その鏗木清方の師匠であった水野年方であり、53冊であった。鏗木清方は、水野年方の跡を継いだのであるが、師匠の水野年方が幕末を代表する浮世絵師、歌川国芳の孫弟子（その弟子の月岡芳年の弟子）であることから、列記とした歌川系の浮世絵師の系譜に入り、口絵画家、挿絵画家としてスタートしたことが、肉筆画の美人画家へと大成する基盤になったと言われている。

この木版口絵を描くにあたっては、鏗木清方は、実際に小説の原稿を熟読して主人公なり、小説の世界を一枚の口絵に表現している。例えば、江見水蔭の『二人女王』では、主人公の蔦子が、箏の技を極めようと、恋人とも別れて故郷の三国峠の石室に籠って修行するため、大きな箏を背負って山道を歩く姿を、絵の右上には、温泉宿で自らの美貌に磨きをかける姉の浪子を、美人画に長けた鏗木清方が、決意を秘めた「二人の女王」として、秋の草花の背景と共に華麗な筆致で見事に描いている。



江見水蔭著『二人女王』
(明治39年)口絵；鏗木清方

表紙絵の世界では、末広鉄腸の『雪中梅』は、水野年方が梅の木に雪が積もる冬の情景を、梅の蕾と共に日本画家ならではのタッチで描いている。幸田露伴の『五重塔・血紅星』小説尾花集』では、福井月斎が木立に囲まれる五重塔の上層部を、森厳かつ幽玄に浮かび上がらせており、表紙絵がベストセラーに導いたのではないかとと思われるほどの出来栄である。

こうして木版の口絵・表紙絵が付かない単行本は売れないと呼ばれた「口絵華やかかりし時代」を迎え、木版口絵・表紙絵が付いた文芸書出版事業は、「青木嵩山堂」の屋台骨を支えるほど大きく成長・発展していくことになる。

<成熟期・衰退期における教養書の出版活動>

「青木嵩山堂」の成長期も、木版口絵付の文芸書がピークを迎えると、成熟期から廃業に向けた衰退期（明治39年から大正7年までの13年間）に入る。この時期を支えたのは、主に漢学書、学術書、教育書・辞書、教科書、美術書などの教養書であった。

漢学書の出版、漢籍の輸入販売については、藍玉製造の農民出身であった渋沢栄一が漢詩や漢文の素

養に秀でていたことからわかるように、明治期は江戸期からの流れで儒学、漢学、漢文、漢詩が教養人の必須の学問であった。これには明治維新が欧化・近代化政策を推進しながらも、一方で忠君愛国教育を推進したために、道徳を重視する儒学と漢文が重視された背景があった。漢学の素養のあった青木恒三郎は、大阪の漢学者にして漢詩人の近藤元粹の薦めで、日清戦争後に唐本（漢籍）をいち早く直輸入販売し、店頭に並べていたのであり、これが冒頭の『暗夜行路』にある「李白の小さい詩集」なり、『幼少時代』にある「白文の『王陽明全書』であった。この近藤元粹は、自ら『箋註唐賢詩集』（明治31年）6冊、『李太白詩集』（明治34年）5冊など、34点、153冊の漢学関係の書籍（和本）を編集・著作している。

この漢学書や漢籍を購入する読者のために、文芸書でみた山田美妙が、漢語辞典として『漢語故諺熟語大辞林』（明治35年）、『新編漢語辞林』（明治37年）を、国語辞典としての集大成である『大辞典』（明治45年）など多くの辞典を出版した。

「青木嵩山堂」の『販売目録』の明治35年版以降の奥付には、「東京帝国大学御用」、「京都帝国大学御用」、「日本女子大学御用」、「高等師範学校御用」などと掲載されている。これは「青木嵩山堂」が明治35年には高等教育界において、学術書ならびに教育書の出版で名声と評価を得ていたことを示している。

「日本女子大学」の御用達・指定出版社になった経緯は、創設者の成瀬仁蔵が著した『女子教育』（明治29年）を出版したからであった。NHK朝の連続ドラマの「あさが来た」（2015年後半）は、明治の女性経営者・広岡浅子をモデルにしているが、その中で浅子は晩年、日本で初の女子大学創設運動を支援する。その浅子に女子大学創設の必要性を説いた著作『女子教育』を携えて大阪に訪れたのが成瀬仁蔵であった。浅子



成瀬仁蔵著『女子教育』（明治29年）

はそれを九州の炭鉱に持ち帰り、涙なしでは読めずに感銘して、2人して女子大創設運動に奔走する契機となった著書であった。

学術書に関しては、法律書では後藤本馬が、『実用問答法学通論』（明治33教育書年）、『六法法典教科書』（明治35年）など18冊の法律解説書を出版している。そして、大日本普通学講習会が編集、各分野の専門家が執筆した大学の教科書的概論を多数発行（大正2年）している。横山達三・小林秀雄『世界史講義』、小磯小三郎『簿記学講義』、松波次郎『農学講義』、吉田弟彦『地質鉱物学講義』など17冊がある。また、西ヶ原叢書刊行会が編集、農学関係の専門家が執筆した農業・牧畜業発展のための実業書を明治41年から大正7年まで順次30冊発行している。内山定一『肥料要説』（明治45年）、鈴木千代吉『肥料的稲作改良法』（大正3年）などである。中等教育テキストとしては、東京法論社『中等教育 経済学問答』（明治35年）、嵩山堂編『中等教育法理学問答』（明治35年）など、幅広く教育書を出版していた。

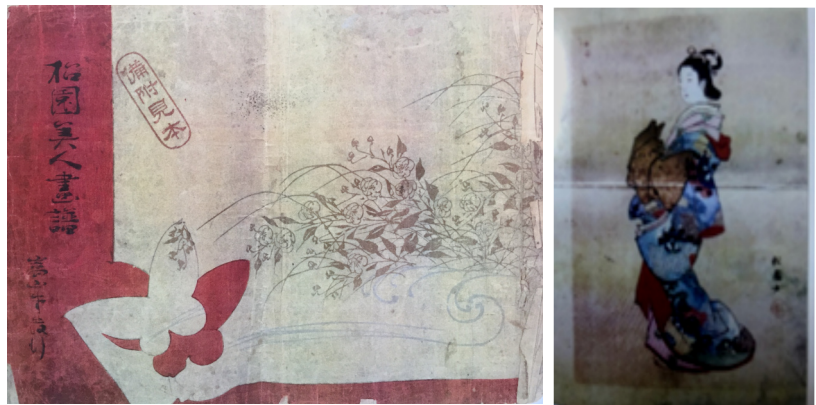
尚、教科書については、明治35年の国定教科書制定以降、国指定有力出版社27社に指定されたこともあり、文部省『高等小学読本』（明治37年）を発行、その後、明治42年に有力出版社4社で教科書製造会社が設立され、日本書籍(株)（博文館）、東京書籍(株)（金港堂）、大阪書籍(株)（開成館・嵩山堂）が教科書の製造販売版権を取得、「青木嵩山堂」の教科書事業は大阪書籍(株)に継承された。

青木恒三郎は大阪書籍(株)の取締役として、「青木嵩山堂」廃業（大正7年）後も死去（大正15年）するまで現役であった。因みに、大阪書籍(株)はその後平成20年まで存続したが、社長のバブル期の不動産投資の失敗で倒産、別会社に著作権が譲渡されている。

教養書として最後に、美術書の出版状況を概観する。「青木嵩山堂」は、江戸期の美術書の再刊を手掛けてきたこともあり、その後、絵師と彫師、摺師の共同作品でもある木版彩色の口絵の付いた文芸書の発行と並行して、明治25年から31年にかけて、口絵と同じ木版制法で作れる美術書を40冊も出版している。但し、それは、単なる江戸期の古画の復刻版ではなく、テーマ別に江戸期から明治期の日本画を編集して、12枚綴りの美術画譜（画集）として企画出版していたのである。『（丸山）応挙聚美画譜』（明治25年）、『（尾形）光琳画譜』（明治26年）などがある。この画譜を制作するには、大きさの違う古画を縮図して統一する必要があったことから、狩野永祥門下の福井月斎（上述の『五重塔』の表紙絵作者）を招き、画譜の編集に当たらせている。

これを制作した時代背景には、明治政府の殖産興業の一環として、欧米諸国への輸出品としての美術工芸品の奨励があったと思われる。欧米の技術と日本固有の技術交流の場である内国勸業博覧会が開催され、「青木嵩山堂」は明治28年の第4回の京都開催にて、こうした美術画譜を出品し、有功三等賞を受賞している。更に、明治33年には、それまでに発行した画譜を「高尚優美美術画譜」として、パリで開催された第5回万国博覧会に出品し、名誉銀牌を受賞している。

後編で詳述するが、明治41年以降は、口絵文化は衰退に向かう。木版口絵・表紙絵は、立派な美術絵画と考えていた青木恒三郎は、美術書出版の巻き返しを図るべく、新たな美術画譜（画集）を企画した。花鳥画、風俗画、歴史物など、テーマ別に著名画家の絵を編集した新たな美術画譜シリーズ「日本美術木版画譜」である。そのシリーズの中で最初に出版された看板画譜は、当時、新進気鋭の美人画家



『松園美人画譜』（明治41年）

として人気も高かった上村松園の『松園美人画譜』（明治41年）であった。更に、松園が尊敬する師の竹内栖鳳や河合玉堂等の風景画が掲載された『日本名所画譜』や、丸山応挙、曾我蕭白など江戸期の蒼々たる画家の絵を揃えた『中古名人画譜』などを相次いで出版、わずか3ヶ月間で一挙に22冊の美術画譜を発行している。

明治24年以降、多くの木版彩色の口絵・表紙絵の付いた文芸書や美術画譜（画集）を発行してきたが、明治31年、32年だけはほとんど木版口絵・表紙絵の付いた文芸書や美術画集は発行していなかった。その期間は『集古十種』の再刊という壮大な美術出版企画事業に向けて「青木嵩山堂」が総力を挙げて準備（印刷・製本）していたからである。『集古十種』は、江戸寛政期に白河藩主、松平定信が画家の谷文晁らに命じて、4年の歳月をかけて全国各地の1,859点の古文化財を書き写させ、碑銘、鐘銘、扁額、肖像画、書画など十種類に分けて編集・収録した古文化財の一大図録である。

この再刊は最初の刊行（1800年）から数えて100年を記念して、領地替え後の桑名藩松平家の旧臣、江間政發（えままさつら）が企図したもので、松平家の江戸蔵屋敷に眠っていた100年前の木版木を使って、「青木嵩山堂」東京本店が手刷り印刷・製本し、再発行したのであった。「青木嵩山堂」にとっても明治32年（1899年）に再刊した『集古十種』は、江戸期の85冊に新たに総目録を3冊加え、当時の版木を使って精巧に再現した一大文化事業であった。冊子の大きさ（縦37cm×横25cm）から、新聞紙大の和紙に表裏一体で手刷りし、真ん中から山折りして袋綴じした美術和本を88冊（1冊あたり平均34枚×88冊＝約3,000枚）印刷・製本して、2つの木箱ケースに収納された「我国美術界における空前絶後の一大出版物」（『販売目録』）であった。



松平定信編『集古十種』（明治32年）

これは松平定信が「古きもの」古文化財が失われることを危惧し、蒐集・記録保存に自らも奔走して編集・制作した一大出版事業を、100年前の木版木を使って忠実に再現しただけでなく、その後も自然災害などで多くの文化財が失われていく中で、文化財の保護・保存の重要性を再認識させたことに大きな現代的意義があると思われる。尚、復刊時に使用された1,451枚の木版木は、三重県桑名市の松平定信を祀る鎮国守国神社に移され、一括して国の重要文化財として保管されている。

これまでみてきたように、旅行案内などの実用書出版から成長の契機を掴み取り、木版口絵・表紙絵の付いた文芸書を成長の柱として発展してきた「青木嵩山堂」は、漢学書、学術書、教育書・辞書、美術書などの教養書の出版を通じて、明治期を支える人々や社会に新たな知識を伝え、情報を発信するメディアとして、或は、社会をリードする公器としての総合出版社として、また、漢籍を含め、時代や社会のニーズを先取りした書籍を東西の店舗だけではなく、カタログ販売を通じて、全国の読者に届けた書店としても、明治社会、明治文化の形成に少なからず貢献してきたことを概観してきた。

次回後編では、全国最大の出版社であった「青木嵩山堂」が、また大手総合出版社の一角となった「青木嵩山堂」が、何故、明治の終焉と共に廃業を決断せざるを得なかったのか、明治期の時代背景や明治文化との関わりの中でその謎に迫ることとしたい。2回に亘る連載となり恐縮ですが、次回後編と併せてご一読願えれば幸いです。

豊かな自然に囲まれた歴史と文化の島、

五島列島 4 日間の島旅！

「2022 年 10 月 25 日（火）～28 日（金）」



（はじめに）

2 年間コロナで中止となっていた五島列島の旅を、今年こそ復活させると決心したのは 3 月末のことでした。

5 月中旬に案内書を発送、最終的には 3 年前の東北旅行を上回る 16 名の参加を得て、無事決行出来ました。

また今回は、「全国旅行支援」の対象となったことで、旅費が上限の 8000 円/泊割引となり、更に地域クーポンも最大の 3000 円/泊が支給されました。3 泊したので一人当たり総額 33000 円（なんと夫婦で 66000 円）もの臨時収入を得たことで、心身共に気楽な旅となりました。ただひたすらお国に感謝あるのみです。

さて五島列島は、九州の最西端である長崎県の西彼杵半島の西方海上約 100 km に位置し、北東から南西へおよそ 80 km にわたって大小 140 余りの島々が連なっています。これを行政面から見ると、長崎県南松浦郡新上五島町が所管する中通島（ナカトオリジマ）、若松島の 2 つの島（いわゆる上五島）と、長崎県五島市が所管す

る奈留島（ナルシマ）、久賀島（ヒサカジマ）、福江島の 3 つの島（いわゆる下五島）とに分かれています。

また五島列島は、自然海浜や海食崖、火山景観など複雑で変化に富んだ地形を有しており、ほぼ全域が西海国立公園に指定されています。

さらに五島列島は、古くから大陸との交流拠点として栄え、遣唐使、倭寇などの歴史的遺産や神社仏閣などの文化遺産も数多く存在しています。

しかし今回の旅行の目玉は何と云っても、2018 年にユネスコの世界文化遺産に登録された「長崎・天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」でした。これは、宣教師不在の中、神道や仏教などの日本的伝統宗教や一般社会と関わりながら信仰を続けた潜伏キリシタンの伝統の証となる遺産群です。この世界文化遺産の 12 の構成資産の内、五島列島に存在する 3 つの構成資産（「旧五輪教会堂」、「江上天主堂」、「頭ヶ島天主堂」）と長崎市の「大

浦天主堂」の計4つの構成資産を巡り、さらには五島列島各地に点在する潜伏キリシタン関連の50近くの教会堂の内、有名な5つの教会堂（青砂ヶ浦天主堂、中ノ浦教会、堂崎天主堂、水ノ浦教会、井持浦教会）を巡りました。今回の旅行は、いわば潜伏キリシタンを巡る巡礼の旅でもありました。

ここで、五島列島の潜伏キリシタンの歴史について、簡単にコメントしたいと思います。福江島を中心とする下五島にキリスト教が伝わったのは、1566年、18代藩主宇久純定（後に宇久氏は五島氏に改姓）が修道士二人を招いたことに始まり、その子の19代藩主が洗礼を受けるなど、一時は2000人ももの信徒がいたが、1614年の徳川幕府の出した禁教令により、一度は信仰の火が消えたとされる。しかし江戸時代後期、九州本土の大村藩から、五島列島開拓の名を借りて、多くの潜伏キリシタンが五島藩に移住してきた。表面上は神仏の徒を装い、宣教師や聖具がない中、観音菩薩やアワビの貝殻模様を聖母マリアに見立て、小さな組を作って信仰を続け、その数は3000人とも言われる。また受け入れた五島藩も、五島列島開拓に重きを置き、本人が信仰を表明しない限り黙認の姿勢を取ったとされる。1873年（明治6年）のキリシタン禁教令解除後、五島では信仰の自由を祝うように50近くの教会が次々と建てられたが、どの教会も例にもれず資金は乏しかったので、信徒自ら建材を運び、釘を打った教会も少なくない。現在の五島列島のキリスト教徒は、人口の2割程度のものである。（日本全国平均は1%）

1. 10月25日（火）：一日目

羽田空港午前6時集合厳守ということで、大半の方は都心に前泊された模様。羽田空港6時55分発のANA1075便で福岡空港に8時50分到着。さらにANA4697便に乗り継ぎ、福江空港（別名つばき空港）



に9時35分に到着。平日にも拘わらずほぼ満席。天気は予報通り晴れ。五島列島到着後の第一印象は、景色も素晴らしいが、とにかく空気が美味しいでした。

空港から観光バスで市内に移動して、「福江城」の傍にある「五島観光歴史資料館」を見学。お城風の建物で、五島列島の歴史や文化の概要を要領よく展示。今回の旅行の予習としてはうってつけであった。

昼食は、歩いてすぐ近くの和食料理屋「S'agara」。五島の食材をふんだんに使ったランチを堪能。旅行の成功を祈って、まずはビールで乾杯。

昼食後、当初の予定ではグラスボートに乗って「海中公園」を散策する予定だったが、残念ながら風が強くてグラスボートは運休。仕方なく「海中公園」はキャンセルし、福江港から海上タクシー（約20人乗りのチャーター船）で次の予定地「久賀島（ヒサカジマ）」に向かう。当初の予定は「奈留島（ナルシマ）」が先だったが、



海上タクシーの船長が当日の潮の加減を考慮して回る順番を変更。

「久賀島」・五輪（ゴリン）漁港到着後、港の傍の、国の重要文化財であり、世界文化遺産の1つでもある「旧五輪教会堂」に歩いて向かう。この教会堂は、外観



は全くの和風建築（瓦屋根）だが、内部はゴシック風祭壇など本格的教会様式となっている歴史的に貴重な建造物。内部には聖マリアではなく聖ヨゼフ（イエスの養父）がイエスを抱いた像が祀られていた。1881年（明

治14年)に別の地区の「浜脇教会」として建てられたものが、1931年(昭和6年)に現在地に移築され、以後50年間五輪地区の信仰のよりどころとなった。老朽化したため、1985年(昭和60年)に解体されそうになったが、これを契機に五島市の管理下におかれ、歴史的建造物として現在に至っている。

海上タクシーで次の寄港地「奈留島」に向かう。快晴



であったが風が強くと海上タクシーは結構揺れた。午後一番のグラスボートの欠航をこれで納得。20分程度で「奈留島」・江上(エガミ)港に接岸、徒歩で、「江上天主堂」に向かう。この天主堂は、木造建築としての完成度が高く、歴史的価値にも優れることで国の重要文化財になっている。またこの天主堂は、禁教期の潜伏キリシタンが狭い谷間に移住し、自らの信仰を続け、解禁後に平地に建てたものであり、潜伏キリシタン集落としての風土的特徴と、カトリック教会堂としての西洋的特徴との融合がもたらした教会堂の代表例として、世界文化遺産にも指定されている。現在の天主堂は、教会建築の名工「鉄川与助」(後述)の設計施工により、1918年(大正7年)に完成。

再び海上タクシーで、「奈留島」・江上港から新上五島町「若松島」の若松港を目指して出発。その途中、丁度干潮だったので、船中から「前島」の「トンボロ現象」(障害物に堆積した砂が砂州を形成し陸繋島に至る現象)をはっきり眺めることができた。その後、揺れる海

上タクシーの中から、キリスト教信徒が弾圧を避けるため隠れ住んだ「キリシタン洞窟」を間近で見学。見学後、ますます風が強くなる中、次の寄港地若松港を目指して海上を爆走。ちょっと怖い思いをしたが、船長やガイドの平気な様子を見ていると、このくらいは五島列島では日常茶飯事なのだろうと勝手に得心した。

若松港に到着後、港で観光バスの時間待ちしている時、品のいい老人から声をかけられた。どこから来たかと聞かれたので、東京からと答えると、その老人は自分も昔4年間東京に住んだことがあると答えた。隣にいた別の老人が、この方はこの近くの「極楽寺」の住職だと言ったので、後で調べたら、なんとこの「極楽寺」は浄土宗の由緒あるお寺で、国の重要文化財に指定されている7世紀に百済で製作された「阿弥陀如来立像」を安置していることが判明。五島列島と大陸との古くからの繋がりを改めて実感した次第である。

若松港から観光バスに乗り、若松大橋を渡って、新上五島町「中通島(ナカトオリジマ)」にある今晚の泊り、「ホテルアオカ上五島」に到着。町の片隅の何もない高台にある真新しいホテル。ホテルで一息いれて、バスで同じ島の有川(アリカワ)港の傍の「割烹扇寿」に向かう。小生が子供の頃よく食べた鯨料理メインの夕食。無事一日目が終わったことに乾杯。

「中通島」の有川港は江戸時代から捕鯨の基地として栄えた歴史があり、割烹の傍にある「海童神社」の鳥居は、鯨のあごの骨でできているそうである。(翌日バスの車中からそのことを確認)

2. 10月26日(水):二日目

昨日に続き本日も快晴。ホテルの朝食は、このホテルの食堂がイタリアンレストランなのに、何故か和風で、美味しい鯛のお茶づけでした。朝食後、観光バスで中通島観光に出発。



まずは、島の東側にある「矢堅目の駅」(ヤガタメノエキ)に向かう。昔この地は、奈魔(ナマ)湾侵入の外敵の見張りのための矢を持った守備隊の駐屯地だったため、この名前がついたそうである。残念ながら朝でしたが、夕日スポットとして名高いそうである。まず塩工房を見学し、その後併設の売店で、ここで出来た塩はもとより、五島うどん、椿油など五島の名産品を各自購入。今朝ホテルで貰った3000円の地域クーポン券の使い初めとなった。

次に、国の重要文化財であり、「中通島」屈指の美しさで賞される「青砂が浦天主堂」に観光バスで向かう。生憎館内は見学できなかったが、教会建築の父と言われ



る「鉄川与助」の手による初期のレンガ造りの教会堂の外観の素晴らしさを堪能。「鉄川与助」は、最初に建てた木造の「冷水教会」を手始めに、昨日見た木造の「江上天主堂」、今日見るレンガ造りの「青砂が浦天主堂」や石造りの「頭ヶ島(カシラガシマ)天主堂」、さらには明日見る木造の「水ノ浦教会」など、構造と意匠が一体となった数多くの教会を建設し、日本近代建築史に輝かしい功績を残した。しかし生涯、仏教徒を貫いた。(「鉄川家」の跡取りとして、ご先祖様のために仏教徒を捨てるが出来なかったそうである)



次に、「中通島」の隣の小島、「頭ヶ島」にある、国の

重要文化財であり、世界文化遺産でもある「頭ヶ島天主堂」に観光バスで向かう。西日本唯一となる石造りの教会で、前述の「鉄川与助」の設計で、10年かけて対岸の島から切り出された砂岩を積み上げて造った。石造りという外観の重厚さとは異なり、内部は淡い色調がベース。天井各所にツバキやバラのような花模様が配されており、優しい雰囲気を出していた。付近には、十字架が載る独特の墓石を持つキリシタン墓地もあった。

「頭ヶ島」から「中通島」に戻る途中、山の上に「上五島空港」が見えた。滑走路は800mで、現在は使っていないが、再開を目指しているとのこと。新上五島町の五島市「福江空港」への対抗意識が垣間見えた。



次は、ちょっと息抜きをかねて、「坂本龍馬ゆかりの地」へ。坂本龍馬が長崎で組織した「亀山社中」が所有していた木造帆船が嵐に会い、この近辺で座礁した。この事故で若くして亡くなった志士たちの冥福を祈る龍馬の像が立っている。本当に龍馬が来たかどうかは定かでないで、「ゆかりの地」という表現になったようである。非常に見晴らしがよく、東方には多くの島影がはっきりと見え、遙か遠くには九州本土の西海市らしい陸地もうっすらと見えた。

やっと遅めの昼食。向かったのは、有川港近くにある五島うどん専門店「麺's はまさき」。中国から直接伝わった麺文化が島独自に発達してできた五島うどん。島でとれた椿油が表面に塗られていて、喉越しツルツル。細麺ながらもコシが強い茹でたのうどんを「うどんすくい棒」ですくって、あご(飛び魚)出汁で食べるやり方が「地獄炊き」。正直美味しかった。お代わりして、二人前食べられた方も。

昼食後、小さな入り江に立つ「中ノ浦教会」に観光バスで向かう。1925年(大正14年)に建てられた木造教会。木造建築には珍しく高い鐘塔を持っており、対岸から見ると教会全体が水面に映え、別名「水鏡の教会」と呼ばれているそうである。

以上で、上五島の見学は終わりにして、「中通島」の奈良尾港から 15:20 発のジェットフォイルで「福江島」に向かい、たった 30 分であっという間に福江港に到着。到着後徒歩で宿泊先の「GOTO TSUBAKI HOTEL」に向かう。島の花である椿の名を冠した五島で一番立派なホテル。部屋のバルコニーから見える福江港と五島灘は絶景であった。

ホテルで一旦休息後、バスで夕食場所の「椿茶屋」へ。なぜ夕食は宿泊する「GOTO TSUBAKI HOTEL」ではないのかと思ったが、実はこのホテルも「椿茶屋」も、更には翌日の夕食場所の「カンパーナホテル」もすべて「五島自動車グループ」の経営であることが判明。翌日の観光バス含めて、すべて「五島自動車グループ」の手内で成り立った福江島観光でした。

「椿茶屋」は高台にあり、店内から眼下に五島の美しい海や空さらには周りの風景を眺めることが出来、囲炉裏を囲みながら自魚や五島牛を焼いて食べる仕組みになっていて、楽しい一晚を過ごすことができた。今夜もしっかり美味しいお酒を堪能。聞くところによると、飲み足りない方は、ホテルの近くの居酒屋に行かれたようである。

3. 10月27日(木):三日目

天候は曇り。ちょっと心配したが、一日傘なしで OK でした。朝食は、ホテルの食堂でバイキング。可もなく不可もない平凡な食材であった。旅行三日目の 27 日は、終日、「五島自動車グループ」の観光バスで「福江島」観光。

まずは、ホテル近くの、「福江城跡」(「五島氏」の居城で幕末の黒船襲来に備えて築城された新しい城)と「武家屋敷通り」を、観光バスの車中から見学。ガイドの説明では、武家屋敷の石垣塀の上の丸い小石は「こぼれ石」と言い、普段は台風に備えた石垣塀の重しの役割をしているが、いざ戦いとなったら武器代わりに用いたそうである。

次は、観光バスで、五島におけるキリスト教復活の拠点である赤レンガ造りの「堂崎天主堂」に向かう。赤レンガ、ゴシック様式はヨーロッパの典型的な教会スタイルである。1873 年(明治 6 年)の禁教令解除後、早くも 1877 年(明治 10 年)から司祭が常在し、1880 年(明治 13 年)には仮聖堂も建立された。現在の天主堂は、日本 26 聖人にささげるため、1907 年(明治 40 年)に

建てられた五島最古の洋風建造物である。遠くイタリアから資材(赤レンガなど)が運び込まれたと言われる。キリシタン資料館が併設されており、1597 年長崎で十字架に掛けられた「日本 26 聖人」のうち、唯一五島出身の「聖ヨハネ五島」の聖骨が展示されていた。また、「聖ヨハネ五島」の殉教像も庭に建てられていた。

次に、遣唐使船日本最後の寄港地として有名な「魚津ヶ崎公園」に立ち寄る。「遣唐使船寄泊地の碑」あり。どこまでも広い海原を見学の後、観光バスで近くの「水ノ浦教会」へ。

「水ノ浦教会」は、木造教会堂としては最大規模であ



る白亜の優美な天主堂。江戸時代末期大村藩から移住した 5 人の男性とその家族からなる隠れキリシタンがその始祖。最初の教会は解禁後の 1880 年(明治 13 年)に建てられ、その後老朽化のため 1938 年(昭和 13 年)に名工「鉄川与助」の設計施工で建て替えられて今日に至る。庭の高台にはまたもや「聖ヨハネ五島」の殉教像が建てられていた。

次は、地域クーポン券で可能な限り五島列島産のお土産買うため、地元愛に長けたバスガイドの提案で、道の駅「遣唐使ふるさと館」に臨時停車。館内には、遣唐使の歴史を記す展示もあったが、小生以外見る人一人もなし。売り場は結構充実していて、NHK の朝ドラ「舞い

上がれ」で有名になった「バラモン凧」もあり、ホテルで貰った二日分 6000 円/人の地域クーポン券の処理に邁進したひと時であった。

次に、日本一美しいと言われる砂浜を持つ「高浜ビーチ」で一服。やっと、「舞い上がれ」に出てくる五島らしい風景に遭遇。でもご婦人方は、景色には無頓着で、何故か、童心に帰って、ひたすら貝殻集めに没頭。

遅まきの昼食を、「NEWパンドラ」というお店で。いわゆる「五島列島うまいもの満載ランチ」を頂きながら、お酒を堪能。特にきびなの刺身は最高でした。

昼食後は近くの「大瀬崎灯台」を見学。東シナ海に突出した断崖の突端にある白亜の灯台は、日本最西端の夕日の名所。またまた残念ながら、今回もお昼でした。

その後、灯台近くの、「井持浦（イモチウラ）教会」に観光バスで移動。この教会は、1897 年（明治 30 年）レンガ造りで創建され、1900 年（明治 33 年）に日本で最初に「ルルドの泉」を作ったことで有名。「ルルドの泉」とは、聖母マリアが 18 回出現したという南フランスのルルドという町にある泉のことで、「井持浦教会」は、これを模した泉（ルルドの町から取り寄せた奇跡の泉水を注いだ泉）とフランスから取り寄せた聖母像を収めた洞窟（聖母堂）を備えている。この教会は、日本最初の霊泉地とされ、現在でも全国からの巡礼団が絶えないという。なお、現在の教会は、台風の甚大なる被害にあったため、1987 年（昭和 62 年）に再建された。

この日の最後の見学は、「五島氏庭園隠殿屋敷」。幕末（1858 年）に五島家 30 代藩主が隠居屋敷として城内に建造。2016 年（平成 28 年）に屋敷部分の修復工事が完了。庭にある金閣寺の丸池を模した「心字が池」や樹齢

840 年という楠が見どころ。しかし庭より興味があったのは、受付で出会った五島家の当主（第 35 代？）と思しき超肥った支配人。ご本人曰く、本当のお住まいは吉祥寺だそうで、関東の有名ゴルフ場に加入し、ゴルフの「マスターストーナメント」をアメリカまで 5 回も見に行ったそうです。自慢げに話しておられましたが、ご先祖様はきっと嘆いておられることでしょう。

見学後一旦ホテルに帰り、すぐ近くの「カンパーナホテル」で最後の夕食となった。ここも先述したように五島自動車グループのホテルで、まずまずの定食料理をいただきながら、ビールと五島焼酎をたっぷり堪能した。例年ですと、最終日の夜は、大カラオケ大会でしたが、今回は残念ながらコロナのお蔭で自粛せざるを得ませんでした。

食事後、タクシーで、「鬼岳展望台」での星空観賞に行ったが、残念ながら天候不良（雲が多かった？）で、空振りに終わった。

今晚も、飲み足りない人は、展望台の帰りに、昨日同様ホテルの近くの居酒屋で二次会を盛大に開催。今回は小生も参加。

4. 10月28日（金）：四日目

本日も快晴。朝食は今朝もホテルの食堂でバイキング。チェックアウト後、歩いて福江港に向かう。福江港売店でお土産購入。これが最後かと思ったら、実はあと二回チャンスありでした。一つは、昼食を食べた「四海楼」



の売店、もう一つは、大村空港の売店です。

さて、福江港を 9:20 に出発したジェットフォイルは最高速度時速 80 km で海上を飛ぶように走り、105 分で長崎港に到着。到着後バスで、「国宝」であり、「長崎・

天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」として世界文化遺産にもなっている「大浦天主堂」に向かう。



「大浦天主堂」は、1597年に長崎で殉教した「日本26聖人」にささげられて1865年（幕末）に作られた教会です。また、「大浦天主堂」は、創建直後の1865年の潜伏キリシタン信徒発見の場所としても有名。天主堂の脇に「キリシタン博物館」が併設されており、五島列島を含めた潜伏キリシタン関連の豊富な資料が展示されていた。これを見た参加者のなかには、先に「大浦天主堂」を見て、それから五島列島を巡った方がよかったという方もおられたようであるが、同感である。そもそも阪急交通社の原案では、「大浦天主堂」ではなく「出島」が長崎の見学予定地であったが、こちらから「大浦

天主堂」に変更したてもらったいきさつあり。変更正解。

お昼は、すぐ近くの「ちゃんぽん」「皿うどん」発祥の店「四海楼」です。ちゃんぽんと皿うどんを半人前ずつ、紹興酒を飲みながら食べました。美味しかったのか、この店の売店でお土産に買う方が結構おられました。「ちゃんぽん」好きの小生も当然買いました。

昼食後、観光バスで、長崎空港に向う。JAL612便の出発時刻の1時間前に到着し、ここで最後のお買い物を済まして、無事15:15に出発。羽田空港に16:55到着後、あっけなく流れ解散となりました。

（おわりに）

まずは、いつも素晴らしい旅行計画を作って下さる阪急交通社さんに感謝です。中でもおなじみの添乗員の那須さん、状況の変化に合わせた予定変更や時間調整に、ベテラン添乗員の実力を遺憾なく発揮して頂きました。お蔭で安全で楽しい旅を満喫することが出来ました。感謝の限りです。

また、初参加にも拘わらず裏方に徹して小生を補佐して頂いた細貝さん、写真班として随所で名場面の激写に活躍された芝本さん、山田さん、本当に有難うございました。

さらに、アイアンクラブの事務局の方々、細かい雑用を気持ちよく引き受けて頂き、有難うございました。

しかし何と云っても、参加の皆さん1人1人のご協力が一番有難かったです。次回も是非今回参加の皆さんとご一緒させて頂きたいものです。

（栗川 勝俊・記）

